科学研究費助成事業 基盤研究（B）研究プロジェクト
『アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究 －中間報告書(2018-2019)－』
Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration
for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages：2018-2019

アラビア語の社会・文化的特質
―挨拶と邪視を中心に―

Arabic Social and Cultural Characteristics
Focusing on "Every-day Greetings" and "Evil eye"

スライマーン・アラーエルディーン
Alaaeldin Soliman

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨:本論では、アラビア語[1]の言語社会における「日常挨拶」と「邪視」の文化的・社会的特質を取り上げ、それらの文化的・社会的特質をアラビア語の外国語教育に導入する必要性を明らかにした。日常挨拶に関しては、イスラーム教の影響を受けている挨拶とイスラーム教の影響を受けていない二種類の挨拶に的を絞り、母語話者による両者の使い分けと、その使い分けの手掛かりになる人の名前、外見的な特徴、相手の言語表現や挨拶に伴う非言語コミュニケーションを述べた。邪視に関しては、邪視を概観し、それが言語表現、とりわけ相手を褒める行為に与える影響とそれらの知識をアラビア語の外国語教育に導入する必要性を説明した。

Abstract: This paper deals with the cultural and social characteristics of "every-day greetings" and "evil eye", and it indicates the need to have these characteristics as essential components included in Arabic foreign language education. As for every-day greetings, I focused on two types of greetings, and described how the native speaker distinguishes between them depending on the information he can gather from places, names, and the outlook of the one he addresses, as well as other non-verbal communication. As for the "evil eye", a general review was done. I explained the impact of the "evil eye" on the linguistic expressions especially the act of praising what others have, so the Arabic learners can use the correct expressions needed in this respect.

キーワード: アラビア語、日常挨拶、邪視、社会・文化的特質
Keywords: Arabic Language, Every-day greetings, Evil eye, Cultural and Social Characteristics

1. はじめに

アラビア語は幅広い地域で使用され､各地ごとに固有の社会･文化的特質が存在するにもかかわらず、アラビア語の外国語教育は標準アラビア語においてもその変種である各地のアラビア語の方言の場合においてもアラビア語の構造（＝文法や語彙など）を中心に行われ、適切な表現をするために不可欠な各地の社会的・文化的特質が重視されていない。

多くの外国語教育では、学習者が当該の言語のアルファベットを学んでから、日常生活で使用される基本的で簡単な挨拶や文型を学ぶ。Council of Europe(2018:138)にも社会言語学的適切性に関する説明において、A1 レベルでは次の能力があげられている。

[1] アラビア語には大別して標準アラビア語と、その変種である各地の方言のアラビア語の二つがある。本論では、標準アラビア語から用例を使用し、必要な場合エジプト方言で使用される形も示す。

Can establish basic social contact by using the simplest everyday polite forms of: greetings and farewells; introductions; saying please, thank you, sorry etc.

このように日常的な挨拶や基本的な文型は「簡単」だとみなされ、基礎段階の A1 の学習者が使いこなせるとされている。事実、アラビア語の学習者が最初に習う挨拶と基本構文は、語彙的にも構造的にも難しくないが、アラビア語の挨拶、または基本的な文型の社会的・文化的難易度は高く、基礎段階のレベルの学習者が母語話者のようにそれらを使用するには社会的・文化的な知識が必要不可欠である。

日本人アラビア語学習者の異文化対応能力育成のため、そして、アラビア語の学習者にとってより良いカリキュラム開発に貢献するために、本論では、これまでアラビア語の外国語教育にとりいられず、言語能力評価の対象にもされてこなかった「日常挨拶」と「邪視」の文化的・社会的特質を取り上げ、これらの二点をアラビア語の外国語教育に導入する必要性を明らかにする。

2. アラビア語の挨拶

アラビア語はアラビア半島の諸国から北アフリカの諸国まで幅広い地域で使用されているので、方言や習慣の違いがあり、限られた紙幅ですべての地域で使用される挨拶を取り上げることは不可能である。そこで本稿では、用例(1)～(3)の基本的な挨拶に的を絞って、それらの挨拶がエジプト・カイロで使用される条件・状況を考察する。

(1) ʾas-salām-u　ʿalai-kum
Def-平安-Nom 上-Pron.2.Plu
Lit: 平安はあなた方の上にある。

(2) ṣabāḥ-u　l-xair-i[2]
朝-Nom　Def-善.Gen
Lit: 善の朝　（意図された意味：「良い朝になりますように」）

(3) masāʾ-u　l-xair-i[3]
夜-Nom　Def-善-Gen
Lit: 善の夜　（意図された意味：「良い夜になりますように」）

アラビア語の挨拶表現は大別してイスラーム教の影響を受けている挨拶とイスラーム教の影響を受けていない挨拶の二種類がある。(1)はイスラーム教の影響を受けた挨拶の典型的な例であり、アラビア語の母語話者だけでなく、イスラーム教徒の挨拶として世界中で広く使用されている。この挨拶は、時間帯と関係なく、いつでも使用できることと、会った時だけでなく、別れ際にも使用できることからアラビア語の学習者にとっては便利な挨拶だと思われる。(2)と(3)は、宗教と関係なく、(2)は午前中に、(3)は昼以降に使用される。つまり、時間帯が重要である。外国語としてのアラビア語教育では、(1)～(3)の挨拶についての説明は上記の解説にとどまるため、それらの挨拶には使用条件がないと思われてしまう。次の 2.1 では、母語話者による(1)～(3)の使い分けについて述べる。

[2] エジプト・カイロ方言では、ṣabāḥelxēr になる。
[3] エジプト・カイロ方言では、masāʾelxēr になる。

2.1. アラビア語の母語話者による「挨拶」の使い分け

上記のように日本人のアラビア語の学習者は、無条件でどこにも、そして、誰に対しても(1)〜(3)の挨拶を使用できると教われるが、アラビア語の言語社会では、それらの挨拶の使用は一定ではない。エジプトの社会には、イスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒（＝コプト）もいる[4]。そのキリスト教徒らの社会の中では、つまり、キリスト教徒同士が話している場合には、イスラーム教徒の挨拶(1)でなく、(2)と(3)、あるいはそれ以外の挨拶を使用する。また、話し手がイスラーム教徒の場合でも、キリスト教の教会に入った場合や相手がキリスト教徒だと知った場合、イスラーム教徒の挨拶(1)でなく、(2)または(3)を使用する。いうまでもなく、例外はある。話し手は、聞き手に対して何らかの理由で自分はイスラーム教徒だということを誇張したい場合、相手はイスラーム教徒ではなくても、イスラーム教の挨拶(1)を使用する場合もある。キリスト教徒らも日常生活中では、イスラーム教徒に対してイスラーム教徒の挨拶(1)を使う人もいる。

イスラーム教徒同士の場合でも、(1)を使わない場合も多い。(1)の挨拶は、形式的な度合いが大きいので、イスラーム教の礼拝所に入った場合、お葬式の場合などの公式的な場面やはじめて会った人に対して自分は、「まじめな人」「真剣だ」だという印象を与えたい場合にはよく使用される[5]。しかし、同じ家族の人同士や友人同士、若い女性同士や「私は今風のリベラルな人だ」という印象を与えたい場合、その使用頻度が下がる。また、イスラーム教では、飲酒は禁じられているため、イスラーム教徒同士でも、お酒を売っている店やお酒を飲める店では、(1)の挨拶の使用は不自然だと思われる。いうまでもなく、話し手の意図が「嫌味」を言うことであれば、適切な表現になる。つまり、酒を飲んでいるイスラーム教徒に対して話し手が敢えて(1)を使えば、「あなたはイスラーム教徒だよね？」、「イスラーム教では酒は禁止されているよ」という意味になる。しかし、話し手が嫌味を言うつもりはなく、ただ挨拶を言いたいなら、(1)の挨拶を使わないと思われる。

2.1.1. 相手を知るための手掛かり

上記で見てきたように母語話者は相手や場に合わせて挨拶を選ぶので、挨拶をする前にまず相手の社会的な所属・アイデンティティーについてできるだけ多くの情報を集めようとする。その情報を集める主な手掛かりになるのは、(a)相手の名前、(b)外見的特長、(c)相手の言語表現である。

(a)　相手の名前

エジプトでは、ほとんどの場合、相手の名前を聞けば、相手はイスラーム教徒かキリスト教徒かが分かる。例えば、相手の名前に Muḥammad、Maḥmūd、ʾaḥmad などの典型的なイスラーム教徒の名前が入っていれば、相手はイスラーム教徒である。一方、Ramsīs、Senefro、Mīna のような古代エジプトの王様の名前やʾilyā のように聖書に出てくる名前の場合、相手はキリスト教徒である。また、相手の名前の中に典型的なイスラーム教徒の名前がない場合はキリスト教徒だということが示唆される[6]。

(b)　外見的特長：髭の有無、相手が身に付けている物（服、ペンダント、指輪）、入れ墨など

エジプトの言語社会では、相手の格好で得られる情報が多い。例えば、イスラーム教徒の聖職者の衣服を着ている人に対して(2)と(3)の挨拶でなく、イスラーム教の挨拶(1)を使うのは常識である。一方、キ

[4] エジプト政府が発表する人口統計ではキリスト教徒の人口は示されていないのでキリスト教徒が占める正確な数は不明であるが、エジプト人口の 10〜15%だと想定される。
[5] イラクの首都バグダードと近隣諸国における挨拶を取り上げた Al-nasser(1993:16)は「イスラーム教徒の社会において、(1)の挨拶 ʾas-salām-u ʿalai-kum は主に男性によって使用されている」と述べている。
[6] イラクではイスラーム教徒の名前から相手の宗派（スンニー派、またはシーア派）まで分かるが、エジプトではイスラーム教徒の大半はスンニー派であり、スンニー派もシーア派によくある名前ʿalī、ʾalhasan などを使用する。

リスト教徒の聖職者の制服を着ている人に(1)の挨拶を使うのは不適切だと思われる。聖職者の衣服だけでなく、一般の人々の衣服、とりわけ女性の衣服からもその人の宗教との関わりの度合いを知ることができる。前世紀の 80 年代の半ばまでカイロに住むほとんどの女性は髪の毛を隠していなかったが、90 年代の初頭から髪の毛を隠す女性が急に増え、今は髪の毛を隠している人が圧倒的に多い[7]。その髪の毛の隠し方もその女性に対する挨拶に影響を及ぼす。例えば、頭だけでなく、顔と手も隠している人に対して、(1)の挨拶は適切だろう。しかし、多くの女性はそこまで厳格の衣服を着ていない。例えば、頭は隠しているが、ズボンやジーパンをはいている人に対して(2)と(3)を使用しても違和感はないと思われる。女性が首飾りに着けるペンダントなどからもイスラーム教徒かキリスト教徒かが分かる。例えば、キリスト教徒の女性は十字架のペンダントを付けることが多い。男性の場合には、頭は隠さないが、礼拝の時に白い帽子を被る男性は少なくない。また、厳格なイスラーム教徒の男性は金製品を身に付けないので、そのような金製品の有無も相手のアイデンティティーを知る手掛かりになる。

男性にはヒゲを生やす人は少なくないが、そのヒゲの形からも得られる情報がある。例えば、原理主義者は口髭を剃り、頬髭と顎髭を生やしてほとんど手入れをしない。一方、「ムスリム同胞団」に所属する多くの男性は、短い口髭、頬髭を生やす。それ以外の髭の形（例えば「口髭だけ」）は、宗教的な意味を持たない[8]。

最後に、相手のアイデンティティーを知るための有力な手掛かりとして、多くのキリスト教徒の男女の右手の手首にある十字架の入れ墨があげられる。

(c)　相手の言語表現

エジプトの言語社会ではイスラーム教徒とキリスト教徒は基本的に同じ言語を使用しているが、明らかに異なるのは、宗教に影響を受けている①人の名前、②宗教関係の文章（新聞の死亡欄や誓いの言葉や宗教関係の行事など）である。他には、イスラーム教徒は将来に行うことを語る前に、ʾin šāʾallāh ＜アッラーが望めば＞という定型表現を付け加える。

2.1.2. 挨拶を伴う非言語コミュニケーション

日本語のような体系的な敬語がアラビア語にはないため、敬語体系に相当する手段によって相手や話題中の人に対する態度や社会的な立場を表現することができない。従って、相手に対する敬意やへりくだりの気持ちは、表情、握手、抱擁、互いの頬にキス[9]をするなどの非言語コミュニケーションの行動によって表現される。上記の(1)〜(3)の挨拶はこのような非言語の行動から切り離すことができず、たとえ適切な挨拶を口頭で述べても、それに伴う握手や抱擁がうまくできなかったら相手に不快感または戸惑いを与えるので、この場合は適切な挨拶を行ったと言えない。例えば、初めて会った男同士の場合、通常握手をするが、相手の手を握る力加減が重要である。相手の手を強く握れば、威嚇だと思われる可能性がある[10]。一方、握る力が弱いと「弱い人」または、「相手は自分より目上だと認めている」という意味になりかねない。男性と女性の場合、もっと慎重になる必要がある。厳格なイスラーム教徒の女性の

---

[7] 筆者は 1987 年から 1991 年までカイロ大学に在学し、その時の女子の同級生に髪の毛を隠していた人は一人もいなかったが、2003 年に留学からカイロに戻った時に勤めていた二つの大学では、キリスト教徒の女子学生以外は全員が髪の毛を隠していた。

[8] 現在、エジプトでは口髭は特別な意味は持たないが、約束をする時に自分の口髭に誓ったり、相手の口髭を罵倒したりする。一部のアラブ人の男性にとって、口髭は「男性らしさ・強さ」の意味を表す。

[9] アラビア語の言語社会における挨拶を伴う非言語コミュニケーションは一定ではなく、多様である。例えば、アラビア半島では、相手に敬意を表す挨拶として男性同士が互いの鼻先を付け合せたり、相手の肩をキスしたりすることがある。スーダンでは男性同士は抱擁するが、キスはしない。

[10] しかし、新しい仕事・役割を任された場合、相手は目上の人でも、「その役割を私に任せても良い」という気持ちを伝えるために、いつもより相手の手を強く握るのは常識である。

中には男性と握手しない人が多いので、母語話者は自分の手を相手の女性に出す前に、2.1.1 で述べた相手を知るための手掛かりを考えた上で行動をする。また男性が女性と握手する場合、通常は男性と握手するより弱い力で女性の手を握る[11]。抱擁は相手との親密な関係を表し、アラビア語の言語社会においては僅かな例外を除いて基本的に男女同士の抱擁はない。抱擁をするのは、男同士、または女性同士、または大人が子供を抱擁する場合だけである。いうまでもなく、同じ家族の中で、つまり、親子同士の場合、抱擁は自然な行為である。男性同士の抱擁は通常、握手しながら、二・三回互いの頬にキスを、または互いの頬を合わせる。

2.2. 教育現場における「挨拶」の扱い方

アラビア語の学習者が基礎段階のレベルで学ぶ基本的な挨拶は、教材の著者や教材の出版元、教師、教育機関の思想的傾向に影響を受けている。例えば、イスラーム教の色が濃い教材では、(1)の挨拶しかなく、会話・スキットには、非イスラーム教徒と思われる人たちも(1)の挨拶を使っている。日本人のアラビア語の学習者は、まず、アラビア語の社会には異なった思想的傾向を持つ人や異なった環境で育った人がいることを理解しなければいけない。そして挨拶をする時だけでなく、会話全体も話し手や聞き手の思想的傾向・社会的な所属に影響を受ける。

したがって、学習者自身がアラビア語の社会の人たちにどのように見てほしいのかを決めた上で、他人の思想的傾向を知る能力を磨くことが重要である。

「挨拶」の能力の評価に関しては、基礎の段階だけでは、外国人の学習者は色々な挨拶を使いこなせることは困難だと思われる。基礎 A1 や A2 レベルでは、次の(A)、レベル B2 または C1 では、(B)と(C)の能力ができれば良いと思われる。

(A) 限られた相手（先生、クラスメート）に対して適切な挨拶ができる。
(B) 初対面の場合、学習者は、自分と相手がいる場所、相手が着ている衣服、身に付けているモノ、相手の宗教関係の言語表現から正確な情報を読み取り、適切な挨拶を選ぶことができるか。
(C) 挨拶に伴う非言語的な行動（表情、握手、抱擁など）を正確に行っているか。

3. 邪視

「挨拶」と同様に社会的・文化的な重要性があるにもかかわらず、これまでのアラビア語の外国語教育において重視されてこなかったことは、「褒める行為」である。これは、アラビア語が使用されている中東地域では、「邪視」というものが恐れられているからである。言語表現においてもっとも「邪視」の領域に触れるのは、他人または他人の物を褒める行為である。従って、通常母語話者にとって、他人を褒める時、慎重に言葉や表現を選ぶことは必要不可欠である。アラビア語の学習者は、基礎段階で習う語彙や構文を使い、人を褒めることができるので、邪視のことを知らないと、相手を褒めているつもりでも、不適切な表現を使うことにより、相手を不愉快にしてしまうことがある。これまで「邪視」に関する研究は、民族学や文化人類学の枠組みで行われてきたが、本論では、邪視が言語表現に与える影響とアラビア語教育における邪視の導入の必要性に注目をしたい。まず、次の 3.1 では、「邪視」という信仰・迷信を概観し、3.2 と 3.3 では、「邪視」を避ける方法とそれが言語表現に与える影響を述べ、3.4 ではアラビア語の教育現場における「褒める行為」の扱い方を提案する。

[11] 通常、女性は肉体的な面において男性より弱いので、男性が女性の手を強く握れば、「がさつ」あるいは「荒っぽい人」という印象を与え、セクハラ行為だと思われる可能性もある。

3.1. 邪視の意味と定義

邪視は、英語では Evil Eye、アラビア語では ʿainu l-ḥasūd〈妬む人の目〉、または ʾal-ḥasad〈妬み・嫉妬〉、エジプト方言では ʾel-ʿēn〈その目〉または ʾel-ʾarr〈美しいモノを見て楽しむこと〉ともいう。日本語では、邪視のほかに、邪眼、区眼、区悪の目、悪魔の目なども用いられる（清水 1983:91）。Elliott (2015:3)では、邪視は、次のように定義されている。

> 邪視の概念は、数千年前から広く普及した民俗信仰であり、古代世界で最も広範に人の行動に影響を与えた信仰の一つであり、この信仰では、人間、神々、悪霊、動物、神話上の人物は、強力な視線を持ち、意識的、または無意識的にその視線でいかなる対象物であってもそれを傷つけたり、破壊したりすることができる。

イスラーム教では、邪視 ʾal-ḥasad とは、「ある人が他人の恵み（＝持っている物）の紛失・破壊を願うこと」だと説明される。イスラーム教における「邪視」は、他人の所有物に害が及ぶことを願う行為にのみ関わり、人の目や視線の力には関わらない。

一方、一般の人にとって邪視というのは、ある人が意識的または無意識的に、相手や相手の所有物を見て羨ましいと思ったり、褒めたりすることによって邪悪な力を起こし、相手や物に害を与えるという考えである。そして邪視によって害を受けると考えられている物は、子供、健康、財産、商売、幸福など人が生きる上では非常に重要なものから、普通の所有物まである。

3.2. 邪視を除ける方法

田舎と都会では、対策の度合いには差はあるが、邪視を避けるための主な対策は次の(d)～(f)の行動に見られる。

(d)　大事な物を隠す

自分の大事なものが他人に見られたり、褒められたりされると悪いことが起こるので、自分にとって大事だと思う物を邪視から守るには、まずそれらを他人に見せず、それらが話の中心的な話題にならないようにすることが基本的な対策である。例えば、健康、商売、勉強の進み具合などについて訊かれた場合、はっきりした答えを避け、ʾal-ḥamd-u li-llāh-i＜お蔭様で＞のような控えめで、曖昧な答えをすることが多い。また、大人数の家族、とりわけ男性の人数が多い家族は「一族の繁栄」、「困った時に力になってくれる」だと思われるので、邪視の対象と考えられる。従って、兄弟の人数が多い人には、「何人兄弟ですか」と訊かれても、答えずに話題をそらしたり、正確な人数を言わなかったりする人がいる。またそういう家族には可能な限り、集まって出かけないように気を使う家族もいる。

(e)　粗末な名前、または発音しにくい名前を付ける

子供は邪視の影響を受けやすいと考えられている。子供が邪視で病気になったり、幼くして死んだりしないように šaḥḥāt＜乞食＞、šiḥāta ＜乞食＞、xēša＜雑巾＞、ḏaʿīf＜弱い＞、ʿiryān＜全裸・裸＞、xašba＜木製の板・棺＞、ġarīb ＜異国の・知られていない・変な＞などの名前を子供に付ける。

(f)　お守り・魔除けを体や守りたい物につける

日本には、人を色々な災いから守るための多くのお守りや護符の種類がある。エジプトにも多くのお守りがあるが、すべてのお守りは人を邪視から守るためのものである。

典型的には、子供の服に小さな目の形の飾りや青い石を着けたり、車のルームミラーに小さな靴や唐

辛子や馬蹄などをぶら下げたりする。オフィス、家の玄関、客間の壁に邪視に触れている聖クルアーンの第 113 章[12]を掛ける人もいる。イスラーム教では偶像崇拝は禁じられており、身を守るためにものを身に着けたりするのは好ましくないので、いうまでもなく、このような行為はイスラーム教の教えではない。キリスト教徒らには、邪視を含め、悪から自分を守るために十字架のペンダントを身に付ける人が多い。

3.3. 邪視が言語表現に与える影響

上記の 3.2 で見てきたように邪視は日常生活の色々な面に見ることができる。最も邪視の影響を受けているものは言語表現である。通常、イスラーム教徒が相手を褒める前に標準アラビア語の用例(4)のように mā šāʾallāh <アッラー（神）が望んだとおり>と言ってから、褒める。エジプト方言の場合にも、褒める前に「アッラーが望んだとおり」を言う[13]。

(4) mā	šāʾa	ʾallāh-u	saiyārat-u-ka	wāsiʿa-t-u-n
Rel	望んだ.3.M	アッラー-Nom	車.Sg.F-Nom-Pron.2.M	広い.Sg.F-Nom-Indef

アッラーが望んだとおり、あなたの車は広い。

話している人がキリスト教徒の場合、イスラーム教徒が使う「アッラーが望んだとおり」ではなく、相手を褒める前に bi-smi ṣṣalīb <十字架の名において>を言う。しかし言うまでもなく、「アッラーが望んだとおり」を先に言えばいくら褒めても良いというわけではない。相手の気持ちへの思いやりで、本人の前で、相手の子供、健康（身体部分や長寿など）、幸せを褒めるのを避けることが無難であるが、褒めなければいけない場合[14]、なるべくさらっと褒めて、決してそれを話題のメインテーマにしないことは常識である。エジプトの言語社会では、親を安心させるために子供に対して、ya weḥeš <この不細工・かわいくないね>ということもあり、これは相手の親の気持ちに対する思いやりと理解される。

他人に不適切なやり方で褒められたり、相手が自分のことを「羨ましい」と感じたりする場合、心の中で ʾallāhu ʾakbar <アッラーは偉大なり>を繰り返したり、クルアーンを唱えたりする。そして相手の邪視の対象にならないように最近の苦労話、病気、生活の不服を言う人が多い。通常、聞き手はこのような話題の急な変化を感じた場合、相手を不愉快にさせないように素直に話題を変える。つまり、邪視は褒め方だけでなく、以下の場合のように、会話の流れにも影響を与えている。

邪視の基本的な考えは、人が他人のものを見たりして、「いいなあ。羨ましい。私もそれがほしい」と思うことなので、相手が自分と同じもの、または自分より良いものを持っている場合、またはお互いがその物の恩恵を受けている場合、相手の邪視に遭う心配はないと思われる。したがって、自分が持っている物についてある程度自由に話せる。これと同様に上司と部下、先生と学生、恋人同士などの関係では、お互いを自由に褒め合っても邪視の心配はないと考えられる。しかし、相手が自分と同じものを持っていない場合、邪視に対する警戒が増し、話せる話題が制限される。例えば、健康な人は、入院している人や病気の悩みを抱えている人に対して自分の健康の自慢話を避ける。また、子供を持っている人は子供を持っていない人に自分の子供の話をしないのは常識である。

アラビア語の言語社会には、邪視以外に褒める行為に制限をかける文化的・社会的な要因がある。そ

---

[12] 聖クルアーン第 113 章の日本語訳「言え、『黎明の主にご加護を乞い願う。かれが創られるものの悪（災難）から、深まる夜の闇の悪（危害）から、結び目に息を吹きかける（妖術使いの）女たちの悪から、また、嫉妬する者の嫉妬の悪（災厄）から。』」（徳増編 2009:807）.

[13] エジプト・カイロ方言では、mašaʾallāh ʿarabītak wasʿa である。

[14] 相手を褒めなければいけない場合というのは、たとえば、相手の家でおいしいご飯を食べた場合や相手の所有物について意見を訊かれた場合である。

れは、相手の女性の配偶者・親類の「美しさ」を褒めることは望ましくないといったことである。一般的に、アラビア語母語話者の社会は、保守的な社会である。従って、通常、男性は他の男性の女性の配偶者・親類を褒めて、「奥さんはきれいですね」、「あなたのお姉さんはかわいいね」というようなことを言わない。

このように、アラビア語の言語社会では、相手を褒める行為に社会的・文化的な特質性があり、適切な褒め方をするにはその知識が必要不可欠である。

3.4. アラビア語の教育現場における褒める行為の扱い方

アラビア語の母語話者は「褒める行為」または、それに影響を与える邪視に対してあれほど気を使っているにもかかわらず、管見では、これまでそれらの項目を取り上げたアラビア語の教材はない[15]。アラビア語の学習者は、通常、アルファベットを数日間で覚えてから、遅くても最初の一ヶ月で次の(5)と(6)のような「A は B」の構文を学び、相手を褒めることができる。

(5) bait-u-ka　　kabīr-u-n
家-Nom-Pron.2.M　　大きい-Nom-Indef
あなたの家は大きい。

(6) ʾusrat-u-ka　　saʿīda.t-u-n　　jidd-a-n
家族-Nom-Pron.2.M　　幸せ.F-Nom-Indef　とても-Acc-Indef
あなたの家族はとても幸せだ。

筆者の授業では、学生に基礎段階から邪視の基本的な考えを紹介し、相手を褒める前に慎重になるようにと教えるが、この邪視関連の表現の理解は進んでいないように見える。次の(g)〜(j)の 4 点が、学生が容易に褒め方・邪視を習得しない理由だと考えられる。

(g) 日本人の学習者の母語である日本語において相手を褒める行為は無標的な行為で、注意しなければいけない行為ではない。
(h) はじめて邪視の考えを説明する時に「とりあえず、褒める前に「アッラーが望んだとおり」と言ってください」と教えるが、上記で述べたように「アッラーが望んだとおり」を言えば、常に適切な褒め方ができるわけではない。例えば、母語話者なら、(5)を「アッラーが望んだとおり」の後に言えるが、邪視を気にする人であれば、(6)のように相手の生活に踏み込んだ表現を言われたくないし、他の人にも言わないであろう。
(i) 上記の 3.3 で述べたように、誰と、そして何を話すかということは、話し手が相手について得た情報の上に成り立っている。しかし、外国でアラビア語を学ぶ外国人は、アラビア語の社会で生活していないので、母語話者のように様々なことを手掛かりにして相手についての情報を集めることができない。
(j) 邪視そのものはタブーの一つなので、母語話者同士でも不適切な褒め方や他の行為によって邪視を感じても、その気持ちは相手に言わない。従って、日本人の学習者が日本国内外で母語話者と交流しても、母語話者が学習者の発音や文法間違いを直すことはあっても、褒め方や邪視関連の表現の間違いを直さないと思われる。

[15] 筆者は Soliman・青山(2017:129)において邪視を概観した。

「褒める」能力の評価に関しては、基礎の段階だけでは「人を褒める」表現を使いこなせることは困難だと思われるので、基礎 A1 と A2 レベルでは以下の(D)、レベル B2 と C1 では(E)の能力ができれば良いと思われる。

(D) 学習者は褒める行為の基本的な文化的・社会的な特質（邪視）を知っており、羨ましさを意味する過剰な反応をせず、褒める前に「アッラーが望んだとおり」を言ってから、さらっと相手や相手の所有物を褒めることができる。
(E) 学習者は、相手が邪視を警戒していることを感じたら、話題を変えたりして、相手の心の変化に対応することができる。

4. おわりに

外国語教育では、外国語の学習を簡単にするため、または学習者の言語運用能力を評価するために、「適切」と「不適切」という明確な輪郭を示す必要がある。本論の執筆では、言語記述において守るべき「言語事実への忠実性」という規則を守りながら、「適切な使用」と「不適切な使用」を峻別することを試みたが、容易なことではなかった。具体的に言えば、筆者は、相手がイスラーム教徒ではない場合、イスラーム教の挨拶を使うべきではないと思う。しかし、これは、あくまでも個人の価値観に基づく立場であり、社会全体の明確な事実ではない。やはり、個別言語における社会的・文化的な特質は、文法や語彙と異なり、話者の社会的な所属、年齢、思考傾向などにより個人差がある。しかし、アラビア語が使用されている社会は比較的に保守的な社会であり、イスラーム教やキリスト教、または本論で取り上げた「邪視」という信仰が言語表現の根底にあり、アラビア語の学習者はそれらの宗教や土着信仰の基本的な考え方を知ることにより、社会全体の「価値観の枠組み」が見えてくると思われる。

ローマ字転写

子音

ʾ	声門閉鎖音	b	有声両唇閉鎖音
t	無声歯(茎)閉鎖音	ḥ	無声咽頭摩擦音
j	有声歯茎硬口蓋破擦音	d	有声歯(茎)閉鎖音
x	無声軟口蓋摩擦音	r	有声歯茎ふるえ音
ð	有声歯摩擦音	s	無声歯(茎)摩擦音
z	有声歯(茎)摩擦音	ṣ	無声咽頭化歯(茎)摩擦音
š	無声歯茎硬口蓋摩擦音	f	無声唇歯摩擦音
ṭ	無声咽頭化歯歯茎閉鎖音	k	無声軟口蓋閉鎖音
ʿ	有声咽頭摩擦音	m	有声両唇鼻音
ġ	有声軟口蓋摩擦音	h	無声声門摩擦音
q	無声口蓋垂閉鎖音	l	有声歯(茎)側音
n	有声歯(茎)鼻音		

母音

a	低非円唇短母音	ā	低非円唇長母音
i	高前舌非円唇短母音	ī	高前舌非円唇長母音
u	高後舌円唇短母音	ū	高後舌円唇長母音

グロス

1	一人称	2	二人称	3	三人称		
Nom	主格	Acc	対格	Pron	代名詞		
M	男性	F	女性	Sg	単数	Plu	複数
Indef	非限定辞	Def	限定辞	Rel	関係代名詞		

参考文献

Council of Europe (2018). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, Companion Volume with new descriptors.*

Elliott, John H. 2015. Beware the Evil Eye. *The Evil Eye in the Bible and the Ancient World. Volume 1. Introduction, Mesopotamia, and Egypt.* Cascade Books.

Soliman, Alaaeldin. 2012. "The End of Death: The Conceptual Metaphor Patterns of Death in Arabic" in *"Facing Finality: Cognitive and Cultural studies on Death and Dying"* pp.126-143.

清水芳見.1983.「邪視研究の動向」『民族学研究』No.48-1(1983) pp.91-100.

Soliman, Alaaeldin. 2001. 「日常生活の中に見る邪視」『エジプト―悠久のおもしろ国へ（ワールド・カルチャーガイド）』」21, pp.44-46.

Soliman, Alaaeldin. 青山弘之. 2017.『大学のアラビア語：初級表現』

徳増公明編. 2009.『日亜対訳・注解　聖クルアーン』.

執筆者連絡先:cairokko@hotmail.com

本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(2018 年度—2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686）の研究成果のひとつとして公開するものである。